

★ボン大学創立200周年での記念演説＝シュタインマイヤー独大統領

この文章は千葉県AALAの機関紙からの転載です。転載にあたり担当の方にお問い合わせしたところ、下記のような経過を教えてくださいました。ご紹介させていただきます。（編集部）

ドイツのボン在住の翻訳家、林フーゼル美佳子さんは、2020年3月ロックダウンに入るドイツで、メルケル首相の演説をいち早く日本語訳され、自身のブログにUPされました。それがあちこちネット上でとりあげられ、知られるようになり、私は直接美佳子さんの「MIKAKOのドイツ語ニュース解説」にアクセスして、記事を読み始めました。ドイツ語の学習が主ですが（私は全く分かりません！）、時々ドイツの社会状況などが書かれていて、ニュース的に面白いと思って読んでいます。

このシュタインマイヤー大統領の式辞も、10月頃からこのブログの中で少しずつドイツ語学習の一環として解説されていますが、日本の学術会議任命拒否の問題に際して、それでは間に合わないので、機関紙用に早く翻訳していただけないかと依頼しました。すると、ボン大学の歴史に関する前半は抄訳、自由・民主主義に関する後半は全訳で、ところどころ注を加えながらドイツの歴史を知らない人にもわかりやすい文章になるよう翻訳してみましようと、快く引き受けていただきました。

なお原文は

「MIKAKOドイツ語サービス」

<https://www.mikako-deutschservice.com/>

に掲載中です。

2018年10月18日、ライン・フリートリヒ・ヴィルヘルム・ボン大学創立200周年を記念するアカデミックイヤー開始に際してのフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー独大統領の式辞

－前半部抄訳－

林フーゼル美佳子（ドイツ・ボン在住、翻訳家）

ボン大学は、3週間前の9月27日に2018年度の大学エクセレンスコンテストの6つの部門（クラスター）で優れた功績を上げ、他に大きく差をつけて最優秀大学であることが公表されました。

ボン大学学長のホッホさん、貴大学の大きな記念日に際して、あなたに直接お祝いを申し上げる機会を得ましたことを大変うれしく思います。このような素晴らしい成功、おめでとうございます。そして何よりも200周年を迎えられましたことに心よりお祝い申し上げます。

ボン大学の輝かしい名声は、ノーベル賞受賞者のラインハルト・ゼルテン氏

（注：1994年、経済学・ゲーム理論研究）やヴォルフガング・パウル氏（注：1989

年、物理学) など比較的最近の著名人によっても高められてきましたが、それは大学創立当初からそうなるように意図されていたのです。今から200年前、プロイセン政府が当時の著名な学者を大盤振る舞いして集めた結果、ベルリンとブレスラウに続く3つ目の大学創立がここで夢のようなスタートを切ることができたのです。

中でも著名なのは、ドイツ初のインド学者であるアウグスト＝ヴィルヘルム・シュレーゲル、歴史学のスター的存在であったバルトルト＝ゲオルク・ニーブール、今日まで賛否両論がある歴史家で自由の戦士のエルンスト＝モーリッツ・アルントなどです。

我が国の民主主義の歴史は、ボン大学の歴史と何重にも絡み合っています。この長い道のりについて、本日はお話しさせていただきます。

創立当初のボン大学には、二重の追い風がありました。1つには現代の大学の在り方についてのプロイセンのフンボルト的考え方、1つには1777年創立のケルン司教区アカデミー・ボンの遺産です。後者は短命ではありましたが、やはり啓蒙思想の落とし子でした。

シュレーゲルの言葉で言えば、「真に新しいものは古いものからしか芽吹かない。過去は我々の未来の礎とならなければならない」でしょう。

どっちつかずのように聞こえるこの言葉のように、三月革命以前の時代(1815～48頃)の思想は啓蒙的、リベラル的であると同時にロマンティックで民族主義的で、それがプロイセン支配下のライン地方に広がっていきました。1848年のフランクフルトのパウル教会議会では、ボン大学教授が7人も出席して民主的な統一ドイツ創立のための、短かったとはいえ、最初の試みにおいて、相当の貢献をしていたのです。

ちなみに、カール・マルクスは、シュレーゲルの聴講生としてライン地方で過ごした2か月の間に、「夜間の迷惑な騒音と飲酒」および無許可の武器所有のため、1日間の禁足処分を受けたことがありました。それはまだ革命的な蜂起ではありませんでしたが、「ウォーミングアップ」期ではあったでしょう。

1896/97年冬学期には、政府の指示でボン大学にも16人の女性が聴講生として来ました。そこから女性の完全な大学入学までさらに12年、女性初の教授に就任するまでさらに14年かかりました。学問の世界における男女平等の達成には、今日でもまだいくつか課題があります。

第二次世界大戦後、西ドイツは本を仮の首都として出発しました。ナチス独裁政権を経たばかりのドイツは、民主主義を学ぶ必要がありました。地理的な近さからボン大学の法学部はドイツの民主主義のために尽力しました。また、政府・行政への太いパイプを持っていたため、新共和国のための公務員候補の養成にも大きな影響を与えました。さらに、政治学部でも大きな動きがありました。カール・ディートリヒ・ブラッハー氏がボン大学を「民主主義の学びの場」にしたいと考え、「政治と現代史学」講座を1959年に創設し、最初の担当教授となりました。彼の1955年に刊行された研究「ワイマール共和国の解体」は基本文献となりました。このようにして、当時のボン大学は若い共和国の国家形成に影響を及ぼしたのです。

ボン大学の歩みは、ドイツの民主主義への長い道のりと密接に絡み合っています。それは紆余曲折の道でした。創立自体は民主主義的行為ではなく、市のロビー活動と国王の認可によるものでした。創立翌年にはカールスバート決議がなされ、自由主義やナショナリズム運動が抑圧されました。若いボン大学にとってこれは大きな障害となり、エルンスト＝モーリッツ・アルントを始めとする最初のボン大学の著名な教授たちが講座を去らざるを得なくなりました。学問の自由が支配者の恩寵によってのみ許容される場合、それはまた認められなくなることもあるという教訓は、今日でも時に思い起こす必要があります。（後編に続く）